
ジェンダーフリー

如月 琴李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジェンダーフリー

【Nコード】

N5765Y

【作者名】

如月 琴李

【あらすじ】

放課後起こった高校生の男女のドタバタ逃走劇を追いかけた。リハビリなので、甘さはあるのかなのか、微妙です。大変短いのでさっさと読めると思います。

本日は晴天。南中はとつくに過ぎたというのに今だ鬱陶しいほど太陽がふりそそいでいる。しかし、その暴力的な日差しも一旦校舎の中に入ってしまったら、幾分か和らぎ、更に教室ではありがたい文明の力の恩恵が満喫できる。尤も今は下校時間も掃除の時間も終わってしまったので、部活動にいそしむものはそれぞれの名前の付いた部室か、グラウンド、もしくは体育館にあり、このホームルームスペースの階はほとんど無尽に近いので、クーラーは付いていないのだが。それでも普通にしていればここは涼しいのだ。

「うわっもう勘弁してくれよっ」

「まーだまだっ絶対今日こそ逃がさないっ」

というのに、そのホームルームの前の廊下を、汗を滝のように流しながら全力疾走で駆け抜けていく二人の少年と少女がいた。教室の中にいた生徒達が何事かと振り返ったときには彼らははるか彼方である。普段はあまり感じないものの、全速力で徒競走するとなると結構な距離がある廊下なのだ。

二人のスピードはほぼ同じでなかなか距離が縮まらない。だがその表情と体格は正反対だった。少年はこれぞ男というぐらいのがっしりとした体格で必死の形相、少女は華奢でポニーテールを揺らしながら余裕で駆け抜けていった。

「大体なっ毎度毎度お前はついやだつつつてんだろ」

あつという間に薄暗い階段に足を踏み入れた少年は、階段を一段飛ばして降りながら、口論を開始した。

「そんなこといわずに入つてよ、誠二っ」

「絶対嫌だっ」

踊り場で勢いよく方向転換しながら、彼は上に向けて怒鳴った。が、対象の顔が意外にすぐ側に迫っていることを知って啞然とし、また全速力で今度は無謀にも2段飛ばしを始めた。

「そんなこと言わずにさあっ！ あんたが入ってくれたらマネージヤーやるからっ」

「だからそれっ順番間違えてるだろっ」

「じゃあどうして帰宅部なのっ！ そんなに体力あるのにつ」

そういう少女もあれだけ走つてのこれだけの長い台詞。とても普通の女子にまねできるものではない。少年は声の大きさの調整をせずに怒鳴りながら走り続ける。

「俺はつやるべきことがあるんだよっそのためには、部活に入ってる暇が無いって何度言や、うわっ」

しかし彼は話しながら足を踏み外し、ものの見事に足を滑らせて数段足の裏で降りた後に数段したの踊り場にしりもちをついた。幸い、すぐ側の銀色の手すりをしっかりと握り締めていたので、大事には至らなかつたが、肩を痛そうに抑えながら彼女を睨みあげるくらいにはダメージがあつたようだ。

「おーまーえーはーっ」

「あ、ははは、大丈夫？」

踊り場から数段下りたところで、しばし止まっていた少女は、ようやくそこから声をかけた。しかし、彼の機嫌は、自分の安否を気遣われた位で直るはずがない。

「じゃなかつたらどうするんだお前はっ！ 大体なんでそこまで俺を入れたがるっ」

「えーだつて、誠二だつたら全国制覇できると思うし……」

「勝手な思い込みに巻き込むなっ」

まるで獣のように少年は吼えたてていた。すると踊り場まで降りてきた少女は少し顔を曇らせた。

「……だつてさあ、生意気なんだよ米田。自分より強い奴はいないつていつつも豪語するし」

「……で？」

「絶対誠二の方が強いでしょ？ あんな奴に負けないでしょ？ だからほら、百聞は一見にしかずって言うし連れて行こうと思って」

絶大の信頼を寄せられて、誠二は上に向けていた視線を戻し、すぐそばの上履きの形に薄汚れた壁にさまよわせた。恐らく誰かがドロップキックでもかましたのだろう。しかし、彼女の視線はしばらくそれを見ていても全く逸れてくれなかった。諦めて彼女と向き直る。

「あのな麻由……俺はあくまでも空手は趣味なの。分かった？」

すると麻由はおもむろにしゃがみこんで彼と視線をあわせた。すぐ目の前に、大きい瞳がある。と思ったら、麻由は彼の肩に手を置いた。

「っ！？」

「だったら一体何してんのよ。毎日毎日超特急で帰って、まさか勉強してるわけじゃないんでしょ？」

「……うっせ……関係ないだろ」

「関係あるっ、あたしとあんたの間に秘密があつていい訳ないですよ」

「どこの法律だそれ……」

誠二は心底呆れるが、麻由の方が勢いというか気迫が何倍も強い。「教えなさいっ」

額が付きそうなほどすぐ側にいられたら、逆らえない。深い意味はなく顔が赤くなるのを堪えるので精一杯だった。観念して小さく呟いた。

「……料理」

「…………は？」

言葉を詰まらせた麻由に、誠二はひとつ溜息を漏らした後、勢いよく息を吸い込んだ。

「あのなっ知ってるだろうけど俺、この春からにーちゃんが大学で飲み会増えて、かーちゃんはパート始めたんだ。けど俺は何か食べなきゃ生きてけねえの！だから必然的に週に数回俺が作ることになった。分かる？ それでもってあの二人はな、妙にグルメでコンビニやらインスタントじゃ満足しないのっだから修行してんだよっ」

それほど大きくは無い声だったが階段に響き渡りその上早口だった。誠二は肩で息をしながら口を空けたままの麻由を見る。

「……何で教えてくれなかったの？ アンタとあたしの仲なのに……」

「お前はそうやって馬鹿にすんだろが、だから……」

「なんで？ 馬鹿になんか」

「俺が料理なんて想像もしてなかっただろ、……っっていうかするな、するなっつってんだろがおい」

やぶへびであった。彼の言葉によって彼女の頭の中には恐らくほわわんと身長180センチあるうかという彼の体にきっちり巻きついたエプロンと、その手に握られているスプーンのようなお玉が浮んだのだろう。

「あつたっ確かにっ……」

麻由は懸命に口を押さえ耐え堪えていた。誠二は苦虫を数匹噛み潰したような顔だ。

「ああもっつ、そうやってお前は笑うからっだから言いたくなかつたんだっ」

しかし、麻由の忍び笑いは止まらない。そのまま暫く腹を押さえていた。

「麻由……てめえ」

「ああごめんごめん……分かったから。そんじゃあたしも付き合ってあげる」

「へ？」

誠二は口をぽかんと開けた。構図が先ほどと真逆である。麻由は手すりにつかまって立ち上がりながら、今度は笑顔になった。

「あなたの料理に付き合ってあげるって言うてるの。あたしこうみえて料理得意なんだから……で、今のところ作れるメニューって何？」

「ハンバーグとかシチューとか、カレーとか……っっておいお前が教えるのか……」

「へー、じゃあポテトサラダとか、ひじきとか、煮物とかでいい？」

誠二が立ち上がるのを待って、二人は残り半分の階段を普通のペースで下り始める。

「お前がそんなの作れるなんて意外だ……」

「あのねえっいくらあたしがじゃじゃ馬だからって料理ぐらい出来ますっ」

「へーどうだか」

いつのまにか言い合う声は狭いスペースに響いては消え響いては消え、すぐに声そのものも遠くなくなっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5765y/>

ジェンダーフリー

2011年11月17日03時23分発行